

殿助が千五百石の與力知を召上げられ、本知六千五百石となり、次いで縫殿助の子監物は三千石に減じたといふ。

**トミタカゲアキ** 富田景煥 トダ 通稱與六郎・織部。父は景周。文政元年十二月家督を嗣いで二千石(内千石與力知)を受け、三年九月天徳院請取火消を命ぜられ、十一年七月父の致仕料五百石を併せ、天保九年八月五日歿。享年六十。景煥は鶴坡と號し、漢籍に通じ、能く文を屬した。

**トミタカゲアキラ** 富田景明 トダ 通稱小與之助・小右衛門。景周の子で、支族雅五郎に養はれたもの。寛政元年幼にして祿三の一を襲ぎ、九年本知千四百石に復し、御大小將組から御馬廻組に轉じ、境奉行・御臺所奉行に任じ、天保八年五十五歳を以て歿した。

**トミタカゲカズ** 富田景和 トダ 通稱與六郎・藏人。治部左衛門。初諱修和。寛延三年父方巢の致仕と共に二千石(内千石與力知)を領し、寶曆四年十月廿一日また父の隠居料五百石を併せ、安永二年九月四日六十二歳を以て歿した。

**トミタカゲカツ** 富田景勝 トダ 通稱與五郎。父は治部左衛門景政。百五十石を領し、天正十一年四月柳瀬の役に戦死した。齡二十五。前田利家はこの月廿七日を以て、父景政に書を興へて景勝の死を悼んだ。

**トミタカゲチカ** 富田景周 トダ 通稱縫殿・權佐。父は主税良郷。幼にして寶曆十二年十二月宗家富田修和の養ふ所となり、安永二年十二月その統を襲いで祿二千五百石(内千石與力知)を受け、四年三月天徳院請取火消に任じ、九年三月小松城番となり、天明五年九月

月御算用場奉行に轉じ、同月能州御預地方奉行を兼ね、六年八月實弟彦左衛門好禮の事件に座して職を免ぜられ、寛政四年六月宥されたが尙無役であり、七年三月天徳院請取火消に再任せられた。次いで享和三年七月出銀奉行となつたが、文化三年十二月之を辭し、文政元年十二月五百石を受けて致仕し、十一年二月廿一日八十三歳を以て歿した。景周字を大資、號を癡龍・痴龍・細照・櫻齋・樂地筆・方竹庵・暮松樓といひ、經學詩賦を乾祐直に學び、又博覽強記にして國史に精通し、兼ねて加賀藩の地理歴史を研鑽し、越登賀三州志・燕臺風雅を編した。この外、猶教訓及び考證に關する著書が少くない。その目錄凡そ左の如くである。

- 越登賀三州志四十五卷
- 燕臺風雅二十卷
- 富氏詩腹纂十五卷
- 櫻齋文集初編十卷
- 櫻齋文集後篇十卷
- 三州徵古錄二卷
- 鈴語類譯三卷
- 汲古北徵錄二册
- 散草門類二卷
- なでしこ二卷
- 莊子滙一卷
- 癡龍語話一卷
- 朝憲纂要一卷
- 幽蘭玉露一卷
- 東璧新煥近代和歌選一卷
- 奥蘭編三卷
- 富氏系譜三卷
- 圖譜捷徑一張
- 亞相公御夜話補註五卷
- 陽廣公偉訓並百詠二卷
- 高岡瑞龍閣記一卷
- 兩亞相公治命書一卷
- 越中萬葉考一卷
- 加州小松考一卷
- 越中布勢湖八勝考
- 榆葉越枝折三卷
- 北鎮二嵩錄
- 金藩諸士譜牒十五卷
- 帳秘藩臣錄二卷
- 金藩諸士祿籍三卷
- 帳秘藩臣錄三卷
- 金藩諸士譜牒五十册

花海園隨筆一卷 しのぶの露一卷  
口譯和歌集二卷 下學老談二卷  
三州故墟圖百餘張 金龍公御墓誌並銘一卷  
暮松樓讀書一家法二卷 卿大夫考徵一卷  
御預人之記一卷 時鐘之銘並引一卷  
禁殺令攷義一卷 金城三永考附菊酒考二卷  
東耶沿革圖譜三卷 異客來北考一卷  
三州正圖三張 白山記校本一卷  
白山莊嚴講記校本二卷 石川郡三宮古帳校本二卷  
管神正傳一卷 管神須磨記考一卷  
國公寛永系譜校本二卷 三州式内神社考

**トミタカゲマサ** 富田景政 トダ 與六郎と稱し、後に治部左衛門と改めた。永祿の初景政尾張荒子で前田利家に仕へ、天正十年越中魚津の役に従ひ、祿四千石を賜はつた。翌十一年其の子與五郎景勝が廿五歳で柳瀬にて戦死の後、隠居して六百石を受け、七尾城の守將となり、文祿二年八月八日七十歳で歿した。景政の祖九郎左衛門長家は越前の人で、中條長秀の劍法を大橋高能から受けて奥秘を極め、之を治部左衛門(初與五郎)景家に傳へたが、景政は景家の弟で後を襲ぎ、中興の祖と稱せられ、これより富田流と稱することになつた。

**トミタカツモト** 富田一元 通稱彌八郎・彌兵衛。初諱清長。父は勝右衛門。遺知三百石を襲いで初め大小將に班し、享保十年五十石を加へ、次第に昇進して御留守居物頭に至り、明和四年閏九月三日七十二歳を以て歿した。

**トミタゴウ** 富田郷 前田家に藏する名刀。郷義弘作。磨上二尺一寸四分。もと伊勢阿濃津城主富田左近將監信廣の有であつたのを、

堀秀政が金十六枚で譲受け、之を秀吉に献じたが、秀吉は秀次に興へ、後また秀吉の手に還り、薨後遺物として前田利家に贈られたもの。地鐵細美の中に小奎目密着し、又及紋も匂ひ口締りて細かく見える中に、物打あたりの方に小き玉連り、締つた句口の先から句足が先へ煙の立上つた如く出て居る。本阿彌家では之を天下一の郷とし、代附の不可能な程の名刀としてゐる。

**トミタサダタケ** 富田貞武 通稱彌六・治太夫。初め前田吉徳の御側小將として新知二百石を受け、享保九年御使番となり、十年百五十石を加へ、十六年父重貞の遺知千六百石を受けて先知を除かれ、寛延元年五百石を加へ、御算用場奉行に任じ、明和六年正月廿一日六十五歳を以て歿した。

**トミタサダナホ** 富田貞直 通稱外記。明和六年父貞武の遺知二千石を襲ぎ、魚津に住、御近習御用等に任じ、天明三年三月三百石を加へ、六月八日五十五歳を以て歿した。

**トミタサダユキ** 富田貞行 通稱權三郎・外記。寛政元年父藏人貞章の祿三の一を襲ぎ、後本知二千四百石に復し、小松御城番・御奏者・今石動等支配・公事場奉行・寺社奉行を經、文政九年四月廿二日若年寄に進み、天保十三年七月八日歿した。

**トミタシゲイ** 富田重家 トダ 通稱主計。大炊・下野。初諱宗高。重政の長子。慶長中前田利長に仕へ、父退老の後一萬六百有餘石の本封を受け、人持祖頭を命ぜられた。後大坂兩次の役に功を立て、利常から感状を受けたが、元和四年八月父に先だち廿四歳を以て歿した。重家の室は宇喜多秀家の女で、利長